

2023年度成人科テキスト

「聖書日課と分かち合い」 12月号



名前

お知らせ

◇ 毎週、成人科を行っています。ぜひご出席ください。

10:15～10:50 地下フェロシップホールにて

◇ 受付で出席表に記入し、グループ分けの番号札を引いてから着席ください。

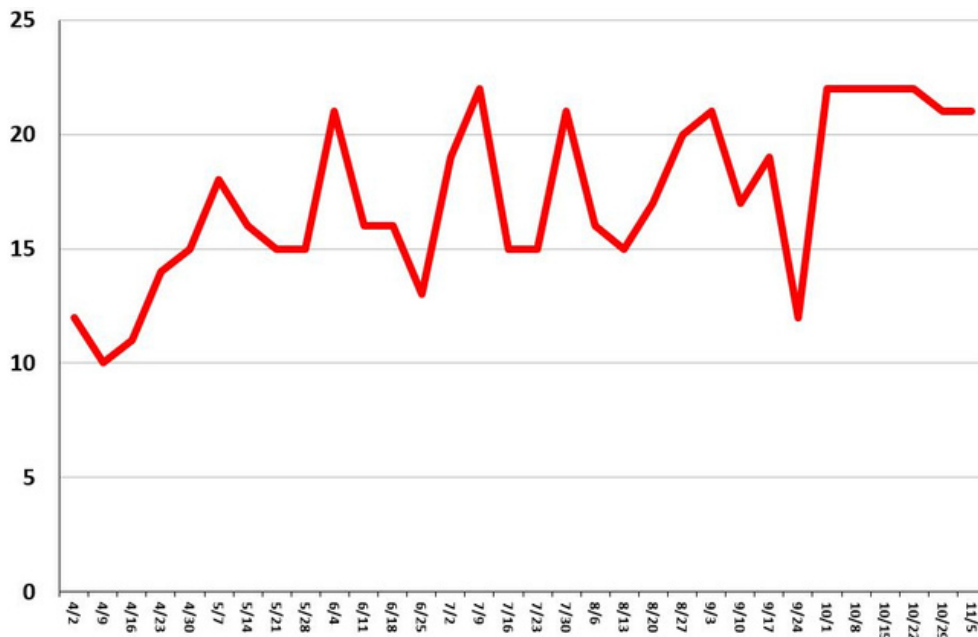
◇ 後から来られる方のために、前列への着席にご協力をお願い致します。

◇ 「聖書教育」誌の購読をお勧めしています。このテキストと併せて、ぜひお読みください。ご希望の方は事務室までお知らせください。

◇ このテキストのボックスへの配布をご希望される方は、担当者（岩崎秀子姉、宇佐美典子姉、郷健人兄）までお知らせください。

◇ ショートメッセージ動画は教会ホームページ上でも視聴できます。10:15のスタートには間に合わない・・・という方や、お休みされた方、もう一度聞きたいと思われる方など、ぜひご活用ください。

学びの輪を広げましょう！



礼拝と学びがバプテスト教会の二本柱。

テキストをお読みくださっている皆様も、ぜひ毎週日曜10:15～の成人科にご出席ください！

今月の執筆者

(左: ショートメッセージ 右: 聖書日課)

36課: 田中由記子姉	宇佐美典子姉
37課: 郷 健人兄	栗山義亜兄
38課: 岩崎秀子姉	渡部和子姉
39課: 郷 秀男兄	小澤敬一兄
40課: 宇佐美典子姉	工藤征治兄

第36課 「その名はインマヌエル」

聖書箇所：イザヤ書7章10～14節（参照7章1～9節）

主題聖句：見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。
(イザヤ7：14)

12月になりました。皆さま、それぞれの場所で、祝福のうちにアドベントを過ごされていることと思います。

今日は、「共におられる主～インマヌエル～」について、イザヤ書7章から学んでいきたいと思ひます。

これは、紀元前8世紀、アハズがユダの王であった時のことです。アラムと北イスラエルが同盟してエルサレムに攻め上ってきました。しかし、「攻撃を仕掛けることはできなかった(1節)」と書かれているように、エルサレムは主のみ手の中で守られました。しかし、両国がユダを攻めてきたことを聞くと、アハズの心も民の心も森の木々が風に揺れ動くように動揺しました。実際には起こらなかったことでも、「こういうことがあったらしい」「また、来るかもしれない」という不安がどんどん伝染し、伝染とともに不安が大きくなって、国中が不安に駆られ、落ち着かなくなっていく様子が手に取るようになります。

しかし、主はイザヤに、アハズに会って次のように言うようにと伝えられます。「落ち着いて静かにしていなさい。」「恐れることはない。」「心を弱くしてはならない。」「アラムが攻めてこようとしているがそれは実現せず、成就しない。」「信じなければ、あなた方は確かにされない。」と。なんと心強いみ言葉でしょう。アハズは、その言葉を聞いて、ただ、神のみ言葉を信じ、従えばよかったのです。しかし、アハズがどう答えたのか、どう行動したのか、聖書には書かれていません。続く10章に「主は更にアハズに向かって言われた。」と書かれているので、アハズは何も答えなかったか、少なくとも、主のみ言葉には従わなかったことが想像できます。

そこで、主は「しるしを求めよ」と言われました。主を信じる者は救われるというしるしです。しかし、アハズは、「わたしは求めない。主を試すようなことはしない。」と拒みます。アハズの態度は、一見、敬虔であるかのように見えます。確かに主にしるしを求めることは、不信仰のように思えます。主の力を信じず、目に見える証拠を欲しがっているからです。悪魔がイエスさまに対して、「神の子なら石をパンに変えてみろ」「ここから飛び降りてみろ。天使が支えてくれるだろう」などと挑発すると、イエスさまは、「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」とお答えになる箇所は有名ですね。神さまにできないことはありません。だからといって、「では、これをしてみてください。してくださったら、神さまのことを信じます。」というのは不信仰です。見ていなくても、聞いていなくても信じるのが本当の信仰です。しかし、この時、アハズは神ではなく、アッシリアに頼ることを考えていたのです。つまり、敬虔なふりをして、実際は、いくら神さまでも無理だろうと、神さまの力を信じず、強国の武力をあてにしていたのです。

神さまの言葉を素直に受け取らないアハズの答えはイザヤだけでなく、神さまにももどかしい思いをさせました。しかし、神さまは「言うことを聞かないならば、滅ぼしてしまえ」というお方ではなく、神さまの言葉を信じられないアハズに対して、しるしを与えてくださいます。どこまでも哀れみ深い主なる神さまです。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、
その名をインマヌエルと呼ぶ。(14節)

主が与えてくださったしるしは、救い主の誕生です。

「インマヌエル」とは、ヘブル語で「神がわたしたちとともにおられる」という意味です。隣国の脅威におびえるアハズに、恐れることはないと告げ、それでも信じようとしない彼に対し、もどかしさを感じながらも、インマヌエルの主の誕生を約束してくださった神さま。

しかし、弱い私たちにとって、主の言葉を信じることはとても難しいことです。

フランスの小説家ジュール・ヴェルヌの言葉に「人間が想像できることは、人間が必ず実現できる。」というものがあります。アインシュタインも「人間が頭で考えることは、すべて実現可能である。」と言っています。逆に、人間が実現できないことは、考えることも想像することも難しいのです。主は、私たちの想像のはるか上を行かれるお方です。ですから、私たちは、主のなさることを想像することができず、言われても、「そんなはずはない」「ありえない」と思ってしまい、私たちの力で確実にできる方を選択してしまうのです。

預言の通り、アラム、イスラエル、ユダは、アッシリアに滅ぼされます。ユダの国は、頼ろうとしたアッシリアに滅ぼされてしまったのです。

私たちにアハズを責めることはできませんが、苦しい時、不安な時こそ、共におられるインマヌエルの主に信頼し、依り頼み、すべてをお委ねしてまいりましょう。

～分かち合い～

- 「共におられる主」ではなく、権力や経済力等、わかりやすい身近な力に頼ってしまうことがありますか？
- 神さまをまだ知らない方に、「共におられる主」について、どのように伝えたいですか？



12月3日（日） イザヤ書7章10-14節

10主は更にアハズに向かって言われた。11「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」

12しかし、アハズは言った。

「わたしは求めない。

主を試すようなことはしない。」

13イザヤは言った。

「ダビデの家よ聞け。

あなたたちは人間に

もどかしい思いをさせるだけでは足りず

わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。

14それゆえ、わたしの主が御自ら

あなたたちにしるしを与えられる。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み

その名をインマヌエルと呼ぶ。

主が示しておられるしるしに気付かず見過ごし、目に見える力に頼ってしまうことがある私たちに、神さまはイザヤを通して主を信じ主を頼るように説いておられます。傲慢にならず主に信頼していきましょう。今日からアドベントです。イエスさまのお誕生を待ち望む日々が、神さまの恵みの到来に備えるよき日々となりますように。

12月4日（月） ペトロの手紙一1章24-25節

24こう言われているからです。

「人は皆、草のようで、

その華やかさはすべて、草の花のようだ。

草は枯れ、

花は散る。

25しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。

どんなに美しく咲いたとしてもその命はやがて枯れるはかなさがあります。神のことは朽ちず、変わらず、永遠に残り続けます。その言葉を胸の内にたくさん刻みましょう。知恵ある神のことは私たちに大きな希望と力を与えてくださいます。

12月5日（火） 創世記28章15-16節

15見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

16ヤコブは眠りから覚めて言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」

神はヤコブに現れ、ヤコブが必要とするいっさいを備えてくださると無条件の祝福を与られます。これは神の大なる計画により、ヤコブの子孫によって、地上のすべての人が救いの道へと導かれるようになるためだったのです。たまたま石を枕にして眠った場所に神のご臨在があるなどヤコブは想像もしていなかったことでしょう。

12月6日（水） マタイによる福音書1章22-23節

22このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

23「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

何かに躓いたり、思うようにいかなかったり、不安になったり...私たちの日々の生活はそういうことの繰り返しです。しかしそのような中で「インマヌエル—神は私たちと共にいる」という神さまからの祝福をいつも心に留めたなら、前を向いてしっかり歩いていくことができるのです。

1 2月7日 (木) 列王記下 | 6章 7-9 節

7アハズはアッシリアの王ティグラト・ピレセルに使者を遣わして言させた。「わたしはあなたの僕、あなたの子です。どうか上って来て、わたしに立ち向かうアラムの王とイスラエルの王の手から、わたしを救い出してください。」 8アハズはまた主の神殿と王宮の宝物庫にある銀と金を取り出し、アッシリアの王に贈り物として送った。 9アッシリアの王はその願いを聞き入れた。アッシリアの王はダマスコに攻め上ってこれを占領し、その住民を捕虜としてキルに移し、レツインを殺した。

アラムと北イスラエルが手を組み、南ユダ王国に侵攻しエルサレムが包囲されます。この国の危機にアハズ王は、主の宮から金銀を持ち出し、大国アッシリアにわいろを贈り救助を求めます。神に信頼し神に助けを求めるのではなく、その場しのぎの危機回復を選んだのです。国と国、人と人を和解させてくださるのは神であるということ信じ世界の平和のために祈りましょう。

1 2月8日 (金) 列王記下 | 7章 1-6 節

1ユダの王アハズの治世第十二年に、エラの子ホシェアがサマリアでイスラエルの王となり、九年間王位にあった。 2彼は主の目に悪とされることを行ったが、彼以前のイスラエルの王たちほどではなかった。 3アッシリアの王シャルマナサルが攻め上って来たとき、ホシェアは彼に服従して、貢ぎ物を納めた。 4しかし、アッシリアの王は、ホシェアが謀反を企てて、エジプトの王ソに使節を派遣し、アッシリアの王に年ごとの貢ぎ物を納めなくなったのを知り、彼を捕らえて牢につないだ。 5アッシリアの王はこの国のすべての地に攻め上って来た。彼はサマリアに攻め上って来て、三年間これを包囲し、 6ホシェアの治世第九年にサマリアを占領した。彼はイスラエル人を捕らえてアッシリアに連れて行き、ヘラ、ハボル、ゴザン川、メディアの町々に住ませた。

北イスラエル王国の王ホシェアは密かにエジプトを頼りアッシリアに対抗しようと画策するも、それをアッシリアに気づかれ、首都サマリアは三年間包囲の後、破壊されました。人々は捕虜として連れていかれ、王国は滅びました。これは神のことばを聞かない背信の結果ですが、神は立ち帰るよう繰り返しメッセージを送っておられ、救いの道も示してくださっていたのです。

1 2月9日 (土) 列王記下 | 7章 7-8 節

7こうなったのは、イスラエルの人々が、彼らをエジプトの地から導き上り、エジプトの王ファラオの支配から解放した彼らの神、主に対して罪を犯し、他の神々を畏れ敬い、 8主がイスラエルの人々の前から追い払われた諸国の民の風習と、イスラエルの王たちが作った風習に従って歩んだからである。

北イスラエル王国の滅亡はエジプトとアッシリアに挟まれた小国の政策の失敗でしたが、そこには預言者たちが警告していた神の裁きを見ることができます。神を礼拝していると言いながら偶像を拝んだり、悪事を日常的にしたり、教えに従わなかったり。神さまの教え(戒め)を守ることはとても難しいです。しかし神は私たちが神と正しい関係を持てるようにいろいろな方法で働きかけておられます。

第37課 「大いなる光」

聖書箇所：イザヤ書9章1－6節

主題聖句：その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる。(9：5)

アドベント第2週となりました。本日の箇所はクリスマスイブの夜、聖書朗読やページェントで紡ぐクリスマス物語の冒頭に読まれることが多いかと思います。少し照明を落とした会堂の中でこの御言葉が読まれる時、救い主のお生まれがその遥か前から告げられていたことに、人との思いを超えた神の壮大さ、威厳を感じる方もいるのではないのでしょうか。

1節では「闇の中」と「死の陰」という言葉が対になって書かれており、アッシリアからの侵攻を前にいかに人々が希望を失っていたかが分かります。また、そこに至るまでの信仰的な逸脱も含めた社会全体の墮落も「闇」を成す一部であったでしょう。様々なことに恐れを抱き、同時に完全に正しくは生きられない私たちの歩みもまた「闇」から離れることができません。

自分が真っ暗闇にいると感じる時、「大いなる光」は道を示し、希望を与えてくれるでしょう。また今の自分は「闇」など抱えていない、正しくまっとうに生きていると考えている人にも「大いなる光」は真実を教えてください。無理やりたとえるなら、部屋の電灯を古びた蛍光灯から新品のLEDランプに替えるようなものです。より強い光で照らされた部屋の中では、目を背けていた汚れ、気付かなかった劣化などが露わにされて、実は掃除や修繕が必要だったことに気付くのです。

毎年のクリスマスをどんな思いで迎えるかは、その時々状況や環境で異なるでしょう。しかしどのような思いを持つ時にも、主が照らしてくださる光は私たちを導き、温め、癒してくださることを心に留めたいと思います。

2～3節は、「大いなる光」を与えられたことを、喜び祝う姿が描かれています。農家でも軍人でもない身からすれば「刈り入れ」や「戦利品を分け合う」ことの喜びを、具体的に想像することは難しく感じます。ただ、作物が実ったことや戦いに勝利したことを、命が続いていくことの喜び、新しい命が与えられた喜び、と捉えれば、少し理解しやすくなるでしょう。闇から光へ。罪から義へ。自分の力に頼る虚しさから、神に導かれる希望へ。それは正に、新たな命に生きることなのです。讃美歌「イエスがここに」がきっと今年も歌われることでしょう。「イエス・キリストがいま、私の心に生まれた」という言葉に、私はイエスさまが一人ひとりの闇を照らし、励まし、導いてくださる姿を思い起こしたいと願います。

4～6節からは、より具体的に「大いなる光」がどのようなお方であるかを書き表しています。

まず4節が語るのは、完全な平和をもたらす方、ということです。兵士の靴や軍服が「ことごとく火に投げ込まれ、焼き尽くされた」ということは、武力が生み出す偽の平和ではなく、真の平和が訪れたことを意味します。それが人間の力で実現できないことは、残念ながら明らかです。これらのイザヤの預言を、南ユダ王国に与えられる次の王への期待・賛辞と読み解く説もあるようですが、“王”にできるのは武力を背景にした統治が限界でしょう。そうした地上の権威、権力を超えたお方を預言しているのが本日の箇所ではないのでしょうか。

5節を読めばいよいよこれは、人ならざるお方の預言だとはっきりしてきます。なにせ「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」です。どれ1つをとっても、人間に相応しい言葉ではありません。ただ、歪めた意味であれば「驚くべき指導者」や「永遠の父」といった言葉が、例えばカルトの教祖や何らかのカリスマ的人物に使われてしまうこともあります。また「神」という言葉すら、最近は気軽に人間に対して使われている感があります。こうした現象もある種の墮落であり「闇」でしょうが、そんな中であっても「平和の君」という言葉だけは、なおお人の手が届かない領域にあると思います。なぜなら、自分の欲を満たすことや、手が届く範囲の安寧を追う限り、真の平和は実現しないからです。欲望に依らず、世界の隅々に至るまで平和をもたらすことができるのは、神の御業のみ、「万軍の主の熱意」のみです。私たちはその御業を、御子イエスさまの先に見るのです。世界中がイエスさまを主と信じる時、必ず永遠の平和が訪れます。

今年は一層、平和に思いを馳せるクリスマスになるかもしれません。様々な悲しいニュースによって心に闇が生まれたとしても、イエスさまという「大いなる光」が必ずその闇を照らし、導いてくださいます。希望と共に、アドベントの時を過ごしてまいりましょう。

～分かち合い～

- ご自身の歩みの中で、イエスさまによって闇から救われた経験はありますか。
- イエスさまは主である、と伝えていくために、私たちにできることを考え、分かち合いましょう。



1 2月10日 (日) イザヤ書9章1-6節

1闇の中を歩む民は、大いなる光を見
死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。
2あなたは深い喜びと
大きな楽しみをお与えになり
人々は御前に喜び祝った。
刈り入れの時を祝うように
戦利品を分け合って楽しむように。
3彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を
あなたはミディアンの日のように
折ってくださった。
4地を踏み鳴らした兵士の靴
血にまみれた軍服はことごとく
火に投げ込まれ、焼き尽くされた。
5ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。
ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。
権威が彼の肩にある。
その名は、「驚くべき指導者、力ある神
永遠の父、平和の君」と唱えられる。
6ダビデの王座とその王国に権威は増し
平和は絶えることがない。
王国は正義と恵みの業によって
今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。
万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

「ミディアンの日」とは士師記に記されている、主が共におられ、ギデオンの戦士300人が何
万ものミディアン軍を破った出来事です。
救い主イエスさまの到来を預言したみ言葉、私個人は「平和の君」が一番イエスさまに相応し
いと思います。この世に平和が成りますように。

1 2月11日 (月) ルカによる福音書2章8-11節

8その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9すると、主の
天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10天使は言った。
「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11今日ダビデの町で、あ
なたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

主の栄光が周りを照らした。羊飼いが非常に恐れるほどのもの。天が開き、眩いばかりの暖か
く強い光が暗い夜空を包み込んだでしょうか。救い主がいつか来られるという「希望」をずつ
と待ち望んでいた民にとって「お生まれになった。」という知らせは本当に大きな喜び、グッ
ドニュースであったと思います。

12月12日(火) マタイによる福音書4章12-17節

12イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。13そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。14それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

15「ゼブルンの地とナフタリの地、
湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、
異邦人のガリラヤ、

16暗闇に住む民は大きな光を見、
死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

17そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

カファルナウム、当時ユダヤを属国としていたローマ帝国軍の駐屯地があったといわれています。

イエスさまは「暗闇の中の希望の光」として、この地から宣べ伝え始められました。

12月13日(水) イザヤ書11章1-10節

1 エッサイの株からひとつの芽が萌えいで
その根からひとつの若枝が育ち
2 その上に主の霊がとどまる。
知恵と識別の霊
思慮と勇気の霊
主を知り、畏れ敬う霊。
3 彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。
目に見えるところによって裁きを行わず
耳にするところによって弁護することはない。
4 弱い人のために正当な裁きを行い
この地の貧しい人を公平に弁護する。
その口の鞭をもって地を打ち
唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。
5 正義をその腰の帯とし
真実をその身に帯びる。
6 狼は小羊と共に宿り
豹は子山羊と共に伏す。

子牛は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれらを導く。
7 牛も熊も共に草をはみ
その子らは共に伏し
獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ
幼子は蝮の巣に手を入れる。
9 わたしの聖なる山においては
何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
水が海を覆っているように
大地は主を知る知識で満たされる。
10 その日が来れば
エッサイの根は
すべての民の旗印として立てられ
国々はそれを求めて集う。
そのとどまるところは栄光に輝く。

平和について考えさせられ、祈る日々が続いていますが、主にある平和の到来が記されています。

この世が「主を知る知識」で満たされる時、本当の平和が実現する。この為に用いられていきたいですね。

1 2月14日（木） 詩編46編2節

神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。
苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。

「拠りどころ」と捉えることも出来ます。苦難のとき、「必ず」そこにいまして助けてくださる神さま。

また、聖霊が私たちの内に宿って下さり、更にイエスさまが与えられ、共に歩いて下さる。無敵ですね。

1 2月15日（金） 詩編121編1-8節

1【都に上る歌。】

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。
わたしの助けはどこから来るのか。

2わたしの助けは来る

天地を造られた主のもとから。

3どうか、主があなたを助けて

足がよろめかないようにし

まどろむことなく見守ってくださるように。

4見よ、イスラエルを見守る方は

まどろむことなく、眠ることもない。

5主はあなたを見守る方

あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。

6昼、太陽はあなたを撃つことがなく

夜、月もあなたを撃つことがない。

7主がすべての災いを遠ざけて

あなたを見守り

あなたの魂を見守ってくださるように。

8あなたの出で立つのも帰るのも

主が見守ってくださるように。

今も、そしてとこしえに。

都もうでの人々が歌っていたといわれています。自分のことは2節までで、「あなた」という対象の為の代理の祈りのような歌詞になっています。そのような目的で都へ祈りに上がっていた方々が多くいたのだと想像できますね。

12月16日(土) ルカによる福音書2章25-32節

25そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。28シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

29「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

30わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

31これは万民のために整えてくださった救いで、

32異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。」

「慰める」とは相手を大切にしてお元気づけること。特に心の悩み、悲しみに対して。(身体の苦しみ、痛みに対しては「労わる」が使われることが多い)

シメオンは私たち信仰者としての指針となるようなお方です。このお告げはそんなシメオンへのご褒美のように思えますね。



第38課 「『その日』を待ち望みつつ」

聖書箇所：イザヤ書25章1－9節

主題聖句：主よ、あなたはわたしの神

わたしはあなたをあがめ御名に感謝をささげます。(25:1)

24章から27章は近代の旧約学において「イザヤの黙示」と言われています。

この箇所は「諸国民に対する預言集の結び」として見ることができます。

ユダ王国における預言者たちの活動は、エルサレムの陥落とバビロン捕囚によって一度終わりを迎えます。預言者は審判と滅亡を預言するのではなく、ユダ王国をいかに復興し、エルサレムの再建をいかに成し遂げるかという課題に向き合います。

この「イザヤ黙示」は、エルサレム陥落の反省と、バビロン他周辺諸国の滅亡を預言し、イスラエルの復興の可能性についても預言しているという見方ができると言われています。しかし、解釈上疑問とされているのが、25章1節から5節の「都」がどこの都を指しているのかということですが、バビロンであると考えるのが、大方の見解と言えるでしょう。今回の聖書箇所の25章1節から9節は、「神の驚くべき御業」という小見出しが書かれており、三部構成となっています。

一部の1節から3節は、「主よ、あなたはわたしの神わたしはあなたをあがめ 御名に感謝をささげます。」という神さまを賛美する言葉から始まります。

そして「あなたは驚くべき計画を成就された遠い昔からの揺るぎない真実をもって。」と続きます。この1節は9節の「この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。」へと繋がり、救い主が来られることを預言します。そしてここでの「驚くべき計画」とはイスラエルの民のエジプトからの脱出と考えられます。

2節の「都・バビロン」は、この時はまだ陥落はしていませんが預言は記され、「都を石塚とし」とは、神の審判で破壊される町に共通する表現となっています。それでも人々に神の御名を感謝し、これから起こる神のご計画を賛美するようにと告げています。

二部の4節5節では、神は弱い者の砦であり、暴虐な者の横暴を鎮めてくださるとあります。来るべき大艱難時代において、神さまはどのように人々を守ってくださるのが預言され賛美の言葉となっています。

未来のある時に、神さまは地上のあらゆる悪の力を滅ぼし、人々の待ち望む御国を立ててくださると続きますが、多くの人々が迫害に合い、国が滅ぼされても、それでも尚、神さまを賛美できる信仰を守り続けることは難しいと言わざるを得ません。

しかし、現代に生きる私たちには、復活されたイエスが共にいてくださいます。イザヤの預言を読む時、信仰の道が正され、心から主による祝福の日々を感謝せずにはいられません。

三部は6節から9節となります。

バビロンの支配が終わり、エルサレムの山で祝宴が開かれることを預言しています。

6節の「この山」は、シオンの山と思われれます。「シオン」という言葉は、エルサレムの町にあった要塞の名前や、要塞がある町の名前や、神殿、神殿付近を指す時、エルサレム・ユダヤ地方、イスラエル人を指す時にも使われています。

しかし一番大切な「シオン」の使われ方は、神学的に用いられることです。イザヤ書60章14節のように、イスラエルを神の民として表す時にも使われています。

シオンの霊的意味は新約聖書にも書かれています。ヘブライ人への手紙12章22節「シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム」、黙示録14章1節「見よ、小羊がシオンの山に立っており」、第一ペトロ2章6節「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、シオンに置く。これを信じる者は、決して失望することはない。」とキリストがシオンの礎だと書いています。

7節の「布」は喪に服する嘆きの時に顔を隠すのに用いられた布であり、布が民の顔を包んでいたのは、イスラエルが他の国に敗れたことを意味します。

しかし神の栄光が表される時、すべての民の顔を包んでいた布は取り去られます。

黙示とは、神が人に神意・真理を示すことで、布が取り去られたという表現は、まさに「神の栄光」が望んだことを意味すると言えるでしょう。

8節は、神が死を滅ぼすことを預言しています。これはエゼキエル37章1節から14節の「枯れた骨の復活」同様に、個人の復活ではなくイスラエル民族の復活を意味しています。「主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい」は、黙示録21章4節「彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。」に引用されています。主は涙をぬぐってくださり、人々の痛みの深さを知っておられ、その上で正しい裁きをしてくださるということでしょう。

9節は「待ち望むその日」について預言をしています。神はいくつもの嘆きを喜びに変えてくださり、悲しみも恐れも苦しみもなく、神の民として受け入れてくださいます。

ヨハネによる福音書8章12節の「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」にあるように、主に従いすべてをお捧げする信仰を歩む時、もはや死は終わりではなく、すべての者が主と結び合うことができる祝福へと招かれます。

そしてやはり9節も神さまへの賛美をお捧げしています。

長沢崇史さんの♪いのちの光♪の歌詞がとてもわかりやすく表現してくださっていますのでご紹介して終わりたいと思います。

♪尽きることのない あなたの愛がわたしを包む
溢れる喜び 全てのものがあなたを歌う
闇を消し去る いのちの光 全てを捨てた愛
手をのばして 光放て
あなたと歩む それは素晴らしい
いのちの日々よ♪

～分かち合い～

- 賛美と聞いた時、あなたはどのような賛美を思い浮かべますか。

1 2月17日 (日) イザヤ書25章1-9節

1主よ、あなたはわたしの神
わたしはあなたをあげめ
御名に感謝をささげます。
あなたは驚くべき計画を成就された
遠い昔からの揺るぎない真実をもって。
2あなたは都を石塚とし
城壁のある町を瓦礫の山とし
異邦人の館を都から取り去られた。
永久に都が建て直されることはないであろう。
3それゆえ、強い民もあなたを敬い
暴虐な国々の都でも人々はあなたを恐れる。
4まことに、あなたは弱者の砦
苦難に遭う貧しい者の砦
豪雨を逃れる避け所
暑さを避ける陰となられる。
暴虐な者の勢いは壁をたく豪雨
5乾ききった地の暑さのようだ。
あなたは雲の陰が暑さを和らげるように
異邦人の騒ぎを鎮め
暴虐な者たちの歌声を低くされる。

6万軍の主はこの山で祝宴を開き
すべての民に良い肉と古い酒を供される。
それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。
7主はこの山で
すべての民の顔を包んでいた布と
すべての国を覆っていた布を滅ぼし
8死を永久に滅ぼしてくださる。
主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい
御自分の民の恥を
地上からぬぐい去ってくださる。
これは主が語られたことである。
9その日には、人は言う。
見よ、この方こそわたしたちの神。
わたしたちは待ち望んでいた。
この方がわたしたちを救ってくださる。
この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。
その救いを祝って喜び躍ろう。

世界には人間の罪の結果理不尽に苦しむ人々が大勢います。でも主は弱い者、苦むの者の砦となり暴虐な者からの避けどころとなって下さる。死を滅ぼし全ての悲しみ、囚われから人々を解放し喜びで満たして下さる。神さまの驚くべき御業に対して、先取りの賛美と感謝から始まる今日の箇所を繰り返し読んでいますと、現実は厳しくても心の中に自然に希望と喜びが湧いて来ます。主の約束に感謝いたします。

1 2月18日 (月) 使徒言行録16章19-25節

19ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。20そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。21ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」22群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。23そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。24この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。
25真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。

正当な理由もなく最悪な状況ですが、「パウロとシラスが賛美を歌い、神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。」とあります。荒くれどもや心の荒んだ者もいたでしょうが、聖霊さまに包まれた神聖な空間が浮かびます。私たちも苦しい時であっても、魂と心を癒してくれる賛美とお祈り(主との深いお交わり)ができることを感謝いたします。

1 2月19日 (火) ルカによる福音書1章18-20節

18そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」19天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。20あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかつたからである。」

13節で、主の天使が「・・あなたは男の子を産む。」と言われた。ザカリアは心の中で願っていたはずのことなのに、自分は年だからと証拠を求めてしまいます。私も省みますと主の前に「語るに早く聞くに遅い。」ことを思います。理解できないことが訪れた時に慌てて騒ぐのでは無く、速やかに主の前に静まって聞く者に変えていただければ幸いです。

12月20日（水） ヨハネによる福音書16章33節

これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

国内外を見まわすと性別年齢を問わず貧困、いじめや虐待、迫害、紛争、戦争が後を絶たず、命が簡単に奪われています。そして、その恐怖と不安に怯えておられる方々が大勢おられることを思うと、非常に悲しく居た堪れない気持ちになりますが、主は世界中の叫びを聞いて「勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」と言って下さいます。今私にとってとても励まされる大切な御言葉です。

12月21日（木） ヨハネによる福音書1章4-5節

言（ことば）の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

子供の頃真っ暗な夜父の運転で、林を抜けられなくなった事がありました。ナビもスマホも無い時代で、母も真剣に「こっちは違うね・・。」と呟きます。ヘッドライトに見えるのは鬱蒼とした木々ばかりで、子供心に(何かに襲われるのでは)と非常に心細く怖くなりました。恐らく数十分でしょうが私にはとても長く感じられ、遠くに電灯が見えた時ほっとしたことを今でも覚えています。例え人生の悩みのトンネルに遭遇しても主の光が照らして下さることを感謝いたします。

12月22日（金） ヨハネによる福音書1章14節

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

神さまは栄光、恵みと真理に満ちた方であられたのに、私たちの愚かさや弱さを引き受けて共に生きるものとなって下さいました。私たちを愛して救うため私たちが豊かになるために、イエスさまは人となってこの世に来て下さいました。感謝いたします。この福音が今生きる希望のない人々に、命の危機にある方々に、貧しさのため惨虐な事をしてしまう人々にも、国々の首長にも遍く届きますように、アーメン。

12月23日（土） ヨハネによる福音書8章12節

イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

以前、全国から患者さまが集まる病院で手術を控えた準備の受診時に、大きな待合室は満席で知り合いも無く心細く思いました。心の中でお祈りをしていく内に、神さまのスポットライトが当たっているように感じ(大丈夫だよ、私が見ているよ。)と励まされました。弱く小さな者にも、全ての人に主は平等に光をあて見つめて下さることを感謝いたします。そのお方を知ることが出来たことを感謝いたします。

第39課 「光は闇の中に」

聖書箇所：ヨハネによる福音書3章16～21節

主題聖句：光は闇の中に輝いている。闇はこれに勝たなかった。

(ヨハネ1：5 口語訳)

皆さま、主イエス・キリストのご降誕を祝うクリスマスを迎えます。クリスマスおめでとうございます。今年はどうのような想いで迎えられましたでしょうか。王宮でもなく、豪華な宿屋でもなく、暗闇に包まれたベツレヘムの馬小屋でお生まれになりました。2000年の昔、ユダヤ・ガリラヤの大工ヨセフとマリアの長子としてお生まれになり、30歳を過ぎて十字架の上で亡くなられた方を、現代でも世界中のキリスト者の喜び祝う祝祭として大切に守り受け継がれています。

今週の聖書教育誌の週題は「光は闇のなかに」です。光はイエス・キリストであり、闇は私たちの生きている世界・世です。ヨハネ福音書ではイエスの誕生物語は語りません。ヨハネ福音書が書かれた当時には既に圧倒的に多くなっていたユダヤの世界を知らない福音を求める異邦人に、特に宣教の中心であったギリシャ人に対して、彼らのロゴスの概念をもってキリストを証したのです。ロゴスとは「言葉」と「理性」の二つのものを意味します。人間の中に内在する神のロゴス、又は神の精神が人間を思考する理性的存在とならしめていると彼らは考えていました。使徒ヨハネは「神の精神は、人間イエスにおいて地上に来た。イエスを見たならば神の精神と思想がどのようなものかわかる」という彼らの思考できる方向でイエスを証したのです。

3:19～20

光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。

「白日の下に晒す」という言葉があります。隠された、隠したい事実が世の中に知られる、知られるという意味です。私たちにはそのような意味で知られたくない闇がどなたにも一つやふたつあるのではないのでしょうか。その罪の縄目に苦しむ自分がいることを分かっています。神の前には罪に定められるような要素が自分のなかに無意識であったとしても存在している、のではないのでしょうか。私たちは自分の中にある闇を光によって照らされて、はじめてあるがままの自分を理解するのです。けれども私たちは自分の現実の姿が照らされて明るみのなかに晒されることを恐れます。また、知られることは恥ずべきことでもあるとも思っています。

3:19

光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。

イエスのみ言葉は確かに恵みであり、励ましにもなりますが、同時に自分自身の罪も浮き彫りにされて神の前に罪人であることを認めざるを得ないと告白しなければならない自分があります。果たして、このような自分が救われるのだろうかと思い悩んでしまうのです。

「裁く」という言葉のもともとの言葉は「区別」という言葉です。私たちの日常生活では様々な場面で選ぶ・区別するという裁きの連続で生活しています。いつもあれが良い、悪い。あれをするかこれをするか、いつも選び、区別して生きていることが私たちの日常なのです。

3:17

神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

しかし、神が独り子イエスを世に遣わしてくださったときには一人として区別なさらず、選ぶことをなさらなかったのです。いつの世でも光を受け入れていない、神を受け入れていない人たちがいます。そんな人たちの心のうちが譬えそうであっても神の側から私たちを捨てる選びは決してなされません。神の愛はイエスを信じる人にも信じない人にも、すべての人に等しく注ぎ与えられているのです。

ですから、恐れることはないのです。希望なのです。神の御前に一步、出ようとするときに踏み出す力は聖霊が与えてくださいます。

3:16

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

神は独り子・イエスを世に遣わして、罪ある者があるがままの姿で受け入れてくださるので

す。闇のなかにいる私たちは光に照らし出されて、初めてイエスは誰であるかを告白できるのです。十字架のキリストは誰のためかを知るのです。それは罪から解放されて背負ってきた重荷を置くことであり、神の愛と救い、永遠の命に生かされる者となることなのです。

クリスマスおめでとうございます。主の祝福が幾重にも皆さまにありますように。

～分かち合い～

- あなたが出会ったイエス・キリストのみ言葉を分かちあってみましょう。



1 2月24日 (日) ヨハネによる福音書3章16-21節

16神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。18御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。20悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。21しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された」父なる神さまは私たち人間が身勝手な振舞いでお互いに殺し合い、そして弾圧、差別、いじめ等、人々を苦しめているのを見て、また私利私欲で大切な地球を汚し、壊し、他の動物を絶滅に追いやっているのを見て、心を痛めているでしょう。平和の願いをこめて独り子を世にお使いになりました。神さまは愚かな私たちを愛してくださっています。神さま感謝致します。

1 2月25日 (月) ルカによる福音書2章6-7節

6ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、7初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

今日はクリスマスです。イエスさまのご降誕を心よりお祝い申し上げます。3人の学者はひれ伏しました。私もひれ伏します。世の光、イエスさまがお生まれになりました。

1 2月26日 (火) ルカによる福音書24章1-12節

1そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。2見ると、石が墓のわきに転がしてあり、3中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。4そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。5婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。6あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。7人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」8そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。9そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。10それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、11使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。12しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。

輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。「あの方は3日目に復活する事になっている」復活されたイエスさまに会い、弟子たちは希望を得て、伝道へと向かいます。今、世界中の人々、1人1人にイエスさまは寄り添ってくれています。神さま、イエスさまの復活をありがとうございます。

1 2月27日 (水) エフェソの信徒への手紙5章8節

あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。

「あなたは、今は主に結ばれて光となっています。光の子として歩みなさい」私たちは神さまに愛されています。愛を受けて日々歩んでいます。感謝致します。その喜びを伝えましょう。

1 2月28日 (木) マタイによる福音書25章40節

そこで、王は答える。「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」

「小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである」あなたのした小さな思いやりは誰も気がつかない。でも、共におられるイエスさまは微笑んで下さいます。

1 2月29日 (金) イザヤ書53章1-5節

1わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。
主は御腕の力を誰に示されたことがあるか。
2乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように
この人は主の前に育った。
見るべき面影はなく
輝かしい風格も、好ましい容姿もない。
3彼は軽蔑され、人々に見捨てられ
多くの痛みを負い、病を知っている。
彼はわたしたちに顔を隠し
わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

4彼が担ったのはわたしたちの病
彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに
わたしたちは思っていた
神の手にかかり、打たれたから
彼は苦しんでいるのだ、と。
5彼が刺し貫かれたのは
わたしたちの背きのためであり
彼が打ち砕かれたのは
わたしたちの咎のためであった。
彼の受けた懲らしめによって
わたしたちに平和が与えられ
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられた」イエスさまは私たちの罪を背負って十字架にかけられました。イエスさま、あなたの愛に感謝致します。

1 2月30日 (土) イザヤ書60章1-3節

1起きよ、光を放て。
あなたを照らす光は昇り
主の栄光はあなたの上に輝く。
2見よ、闇は地を覆い
暗黒が国々を包んでいる。
しかし、あなたの上には主が輝き出で
主の栄光があなたの上に現れる。
3国々はあなたを照らす光に向かい
王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む。

「あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く」希望を持ちなさい。自信を持ちなさい。前に向かって歩みなさい。私がおあなたを支える。神さま、感謝致します。

第40課 「希望が語り継がれて」

聖書箇所：イザヤ書61章1－3節

主題聖句：彼らは主が輝きを表すために植えられた正義の樅の木と呼ばれる（61：3）

バビロン捕囚から解放され帰還したイスラエルの人々は、経済的な貧しさだけでなく、エルサレムの荒廃に心を痛め、希望をなくしていました。「こんな生活がいつまで続くのか」「なぜ神さまは助けてくれないのか」「神さまは私たちが忘れてしまったのか」人々の嘆きは尽きません。経済的な貧しさ、そして信仰上でも拠り所をなくしている人々に、神の憐れみ深い意図に基づき、良い知らせ・救いの計画を語るよう主のしもべが遣わされます。今日の聖書は主のしもべの召命の箇所です。イザヤは詩的表現によって苦しむ人々の嘆きと主の解放の良い知らせを語っています。灰を頭からかぶるという行為は悲しみを表しています。頭は白く顔は暗くなります。しかし灰の代わりに冠が与えられるというのです。人々はその輝きに目を留め明るくなった顔を見るでしょう。そして人々は正義の樅の木と呼ばれます。常緑の生命力にあふれた強い木です。詩編1：3の流れのほとりの木と同じです。見捨てられたと人々が思っている、神は決して見捨てず、神の恵みの約束は必ず実現するのです。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。」（ルカ4：18a）

主イエスは公生涯の初めに、ナザレの会堂で今日のイザヤ書の箇所を読んでご自身にあてはめて語られました。（ルカ4：16-19）ご自分が「油を注がれた」メシア（救い主）であると宣言されたのです。

イエスは貧しい人への福音宣教が大切と覚えておられました。なぜ貧しい人が対象なのでしょう。貧しいというのは経済的な意味だけではなく、女性・子ども・病人など社会の底辺にいる人はみな貧しい人だったのです。意外なことにそこには金持ちも含まれていました。例えば取税人、彼らも人々から嫌われ疎外された人たちでした。主イエスはそんな彼らのために来てくださったのです。

「主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（ルカ4：18b）

主の言う自由とは何でしょう。イエスの与えてくださる自由は、「自由気ままに気楽にのんびり、何にも束縛されない」（freedom）という状態とは違います。「**御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子イエスの支配下に移してくださいました（コロサイ1：13）**」という事実に基づく自由(liberty)なのです。それは罪や恥の過去から解放され、イエスが実現される新しい神の国の民にするということです。この新しい神の国の民になるよう主イエスは、私たちのことも招いておられます。

ルカ福音者の5章以後を見ると、このあと、イエスはご自分の働きの助け手として、12人の弟子を選びますが、それはいろいろな人の寄せ集めのようなメンバーでした。漁師、ローマ帝国の手先だった取税人、反ローマの過激派、とてもじゃないけれど仲良くやっていけそうなメンツじゃないですね。出身も生活環境も仕事も考え方も違い、互いに反目しあいそうな人々をイエスはあえて選びました。神の国ではそのような人たちが、和解し共に支え合い祈りあっていくということ、弟子選びを通して教えてくださいました。弟子たちはイエスと一緒に行動しイエスから学び、やがて、十字架と復活の体験から福音を宣べ伝える働きを受け継ぐようになります。あらゆる国の人々を主の弟子とするため、イエスの命令に従い出ていったのです。

私たち一人ひとりがイエスに招かれた弟子であり、自分（たち）に何ができるかを、個人として教会として祈り求めることは、イエスの願いであり、私たちの共通の願いでもあります。時が良くても悪くても主の救いのみ言葉に希望を持ち、福音を伝えていくものとなれますように。2023年の歩みが守られたことを感謝し、2024年も聖書のみ言葉に聴き、主に信頼し希望を持ち共に歩んでまいりましょう。

～分かち合い～

- 2023年を振り返ってみましょう。人生の節目となるような大きな出来事、日々の生活の中で体験したこと、何かを達成したこと、とくに問題なくつつがなく暮らせたこと…など自由に分かち合いましょう。

◆聖書の中の榿の木◆

聖書には樹木がたくさん登場します。ぶどうの木、オリーブの木、レバノン杉、なつめやしの木、いちじくの木などです。榿の木は長命で立木であり、知識・強さ・力・精神的な知恵などを象徴しており、多くの場合は神ご自身の比喻として使われています。創世記にはアブラハムが「mamreの榿の木」や「moreの榿の木」のもとに祭壇を築き神を礼拝したと記されています。



1月31日（日） イザヤ書61章1-3節

1主はわたしに油を注ぎ
主なる神の霊がわたしをとらえた。
わたしを遣わして
貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。
打ち碎かれた心を包み
捕らわれ人には自由を
つながれている人には解放を告知させるために。
2主が恵みをお与えになる年
わたしたちの神が報復される日を告知して
嘆いている人々を慰め

3シオンのゆえに嘆いている人々に
灰に代えて冠をかぶらせ
嘆きに代えて喜びの香油を
暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるため
に。
彼らは主が輝きを現すために植えられた
正義の櫟の木と呼ばれる。

いつの時代にも苦しみ/悩みの中にいる人々が大勢います。
イザヤはイエス・キリストの降臨を預言し、人々を勇気付けたのでしょ

1月1日（月） ルカによる福音書4章16-21節

16イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。17預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。
18「主の霊がわたしの上におられる。
貧しい人に福音を告げ知らせるために、
主がわたしに油を注がれたからである。
主がわたしを遣わされたのは、
捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、
圧迫されている人を自由にし、
19主の恵みの年を告げるためである。」
20イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。21そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。

『「この聖書のみ言葉は、あなたがたが耳にした時、実現した」と言われた』とありますが、この箇所を理解するのは難しい。
弟子達はイエス様と寝食を共にされたが、民衆の前で話された譬え話の意味が解らず、宿に戻ってから質問していました。民衆は理解出来たのでしょうか。

1月2日（火） コリントの信徒への手紙II 6章1-2節

1わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。2なぜなら、
「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。
救いの日に、わたしはあなたを助けた」
と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。

(ローマ書5章3-4節) 「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」。日常いろいろな悩みが有っても、聖書のみ言葉が立ち向かう勇気を与えてくれます。

1月3日（水） ルカによる福音書5章38-39節

38新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れねばならない。39また、古いぶどう酒を飲めば、だれも新しいものを欲しがらない。『古いものの方がよい』と言うのである。」

変わろうとする私達を阻む[古いもの]。世界も日本社会も絶えず変化しています。キリスト教として絶対に変えてはいけない事はあります。しかし社会の変化に対応し、変えても差し支えないものは変えないと、若い人達の足は教会から遠のきます。

1月4日（木） ヨハネによる福音書 | 章 | 9 - 23 節

19さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、20彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。21彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。22そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」23ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒野で叫ぶ声である。

『主の道をまっすぐにせよ』と。」

いろいろな人達がいるから、社会が経済が成り立っています。

そしてどこの社会にも貧富の差があります。貧しい人達を救済しない社会は衰退します。

1月5日（金） ヨハネによる福音書 | 章 | 32 - 34 節

32そしてヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。33わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を受けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を受ける人である』とわたしに言われた。34わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」

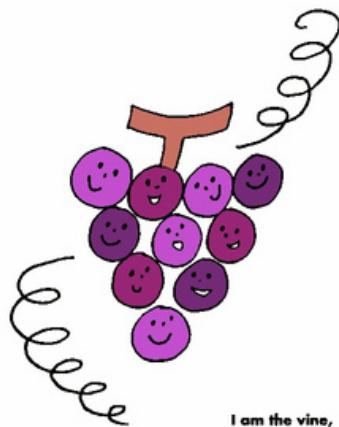
「見ないのに信じる人は幸いである」と云う。

「ただ信ぜよ、教団の指示に絶対従え」と云う偽宗教をどう判別するのか、ノン・クリスチャンには難しい。

1月6日（土） ヨハネによる福音書 | 章 | 35 - 42 節

35その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。36そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。37二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。38イエスは振り返り、彼らに従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まっておられるのですか」と言うと、39イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはずいて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。40ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。41彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った」と言った。42そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」と言われた。

一般社会では、人の言う事には「本音と建前」があると、よく言います。そしてその人の行動を見て、その人を判断します。言葉は行動を伴って、初めて信頼されます。



I am the vine,
you are the branches
John 15:5

2023.12 成人科